

①

水道水 / 10 匹



2012 年 7 月 27 日

②

碧い水の鼓動 / 10 匹



水道水 / 4 匹



2012 年 8 月 2 日



碧い水の鼓動 / 10 匹



①の容器には水道水、②には『碧い水の鼓動』を注ぎ、それぞれ 10 匹の金魚を入れました。金魚にとってはストレスがかかって、免疫力が低下し、代謝も良くない状況です。上段は実験を始めた 7 月 27 日、下段は一週間後の 8 月 2 日の様子です。①の水道水は濁りがひどく、生き残った金魚が 4 匹に対し、②の『碧い水の鼓動』は水に透明度があり、10 匹の金魚がすべて生き残りました。これは『碧い水の鼓動』がきわめて体内の水（生体水）に近く、金魚の生体を与える負荷が少なかったことが考えられます。

MIZUPOTO Letter 2012 年 11 月号より

七日後の金魚の明暗。



以前の『ミズポトレター』でお伝えした金魚の実験。もう少し深く、ていねいにお話してほしい、と編集スタッフより、水まきおじさんをお願いしました。だって、不思議じゃありませんか？ 水道水と『碧い水の鼓動』、見た目は同じに見えるのに、一週間後、どうして一方の金魚は死ぬものがいて、もう一方はすべての金魚がきれいな水で生きているのでしょうか。

金魚がいるのに

いつまでも水が濁らない。

前のページの実験は、右の『碧い水の鼓動』の水の方が、金魚一匹も死亡せず、十匹すべてが生存しているから、『碧い水の鼓動』の水が良い。という、単純な実験とその結果ではありません。この実験で確認したかった最大のポイントは、『碧い水の鼓動』の水が、単なる外の世界の水と同じような水ではなく、生物の体内の水（我々はこれを生体水と称します）にいかに近づいているか、というところでした。

水が濁っていない。ここに着目しましょう。

誰しもが知っているように、あちこちにある池の水は濁っています。ある池は緑色、ある池は茶色っぽく、という風に。これは、微生物の繁殖や有機物の酸化が進行し、水の能力が劣化した結果です。（この場合の水の能力とは、濁ることなく、清浄な状態を保っていることを指します）

一方、私たち人間はもちろんのこと、ほかの動物や植物の体内の水は、酸化や腐敗で濁ることはなく、常に分解を繰り返して、清浄な状態を保ちます。

外の世界と体内の水。

では、外の世界の水と、生物の体内

の水はどう違うのでしょうか。

体内には、脂質やタンパク質がたくさんありますが、それらの物質が体内にある間は、腐敗や酸化はしません。ところが、それらの物質を体外に引っ張り出した途端、その脂質やタンパク質は酸化や腐敗といった方向に進むのです。

水の生命への関与。

体内の水は、私たちが思うよりも生命に積極的に関わっています。

私たち動物類は、タンパク質の集合体ともいえます。そのタンパク質は四つのアミノ酸の連鎖でつくられています。アデニン、グアトニン、シトシン、チミン。この四つのアミノ酸の連続の仕方です。さまざまな形態のものがつくられるわけですが、大事なことは、ここに水が必要なことです。

つまり、水がなければ、いくらアミノ酸があっても、タンパク質に変化させられないのです。たとえば、材木やセメントなどの材料があっただけでは家はできませんね。家を建てるには、設計図が必要であり、実際に建てる技術と労力が必要です。そうすると、水を単なる媒介物と考えるのは、いささか安直ではないか、そう思えます。そこで、水をもっといいねいにみつめると、水のなかに、生命情報伝達物質である

微量の鉄化合物を発見しました。

生命情報伝達物質。

外の世界と体内では、同じ物質が、まったく次元の異なる物質に変化しているのです。

体内では、すべての物質が生命維持のために必要な反応をする、整然とした反応系になっています。それに反して、外の世界では生命の維持とはまったく関係のない、ある意味で乱雑な反応系になっているということです。

その系を左右している鍵が、先ほど申し上げた生命情報伝達物質（微量鉄化合物）の存在です。体内の水にはそれがあ、外の世界の水にはそれがありません。そのため、反応系が異なるのです。

外の世界に

体内の水を存在させる。

外の世界の水には、体内の水に存在する生命情報伝達物質が存在していません。では、逆に、外の世界にそれを存在させてみるはどうでしょう。その試みが、前ページの実験なのです。うれしいことに、実験の結果は、『碧い水の鼓動』を開発・製造した、私たちの仮説を実証するものとなりました。『碧い水の鼓動』は、体内の水と同じ、生体水であると考えられ、それを金魚の容器に入れると、外の世界に、体内

水まきおじさん



私たち人間はすっかり環境を悪くしてしまった。
これはいかん。子や孫になんとか美しい環境をおくりたい。
おじさんは、今日も水をまいています。

第5回 「生命環境維持空間」

の水を存在させることになります。金魚たちにとっては、自分たちの体内の水と同じ、生命情報伝達物質のある整然とした反応系が外の世界にあることになります。

金魚の排泄物はどう？

はて……？　そこで疑問が生じました。金魚の排泄物はどうなったのでしょうか。四匹よりも十匹の方が排出量が多く、その分だけ水は濁らなければならないのに、結果はまったく逆になっているわけです。

まだ100%の確認はできていませんが、おそらく、金魚の排出物の一部は金魚のエサとしてリサイクルされているはず。その残りは、目に見えないほどの小さな粒(砂)のようになり、水槽の底に沈んでいるはず。

この部分は疑問が解消するまで、今後でも繰り返し、繰り返し実験を重ねて行きますが、私のなかに、この水槽が、小さなひとつの地球になっているのではないか、という仮説が起りました。

金魚の排泄物は、『碧い水の鼓動』と水道水、それぞれで違う運命をたどったのです。

これもまだ仮説の段階ですが、『碧い水の鼓動』の水槽の環境では、還元の方へと進み、排泄物は分解、分解へとひたすら進み、物質が原子変換

を起こし、その環境に適切な物質へと変化した。その一方、水道水の水槽の環境では、酸化の方へと進み、排泄物は、腐敗したのでは、と考えられます。

『碧い水の鼓動』の水槽と同じことが太古の地球では起こっていたのではないのでしょうか。外の世界は、適切な生命環境維持空間で満ちており、それは自然現象であつたはず。一方、水道水の水槽は、いま住んでいる環境です。私たち人類は、科学万能、物質万能主義によって、生命環境維持空間をみずから破壊してしまつたのではないのでしょうか。

生きている水を取り戻そう。

生命環境維持空間では、常に水は還元に向かっています。それは生きている水なのです。

ところが、私たちがふだん口にできる水は、そのままでは死んだ水です。金魚が死んでしまつた水槽のなかのような、乱雑な反応系の水なのです。消毒したり、濾過したりして、見た目をごまかしていますが、生命力はありません。

そういった悲しい状況で、いのちに對して高品質な水を、と開発したのが、『碧い水の鼓動』であり、『碧い海』です。生きている水をあなたに。あなたの愛する人に、隣人に。そして、濁つた池に、

野菜に、お米に、牛に、豚に、鶏に。

私たち『一般社団法人 地球と水と命』は、いのちに対して高品質な水を広めるために誕生しました。私たちが壊してしまった環境を、子や孫のために、できるだけ早く再生し、再生だけではなく、より美しいものにしましょう。この活動や考えに多くの方のおちからをくださいませんか。ともに、生きている水をまきましよう。

生命環境維持空間では、常に水は、還元に向かっています。それは生きている水なのです。



Text by
Kohsuke Sakai

酒井宏祐

Profile of Kohsuke Sakai

1943年奈良県生まれ。近畿大学法学部中退後、バイオエネルギー研究所及び生命環境工学中根研究所にて生命体における、情報伝達のメカニズム及び情報伝達素子等の研究に従事。1994年頃より独自理論を加味した、各種波動機器類の研究と開発に着手。2000年、波動計測器を含む、他の波動機器の製作。2011年、上原囂(大阪府立大学・名誉教授)と共に、水の開発に着手。現在、一般社団法人「地球と水と命」理事